

六の中に「配達」があつて、からだ、橋、新聞、店などの、より身近なことがない。言語指導の上で、また広く幼児教育の上で、現在の絵本をどのように位置づけて使用するかについては教師の研究を要する問題である。また理解が困難と思われる語、たとえば「銀世界の広場におどる」とか「無法者」とかの語もみられる。

(1) 方言、俗語、幼児語、外来語の使用にも不用意な面がみられる。要するに絵本の現状は教師が各種絵本の特徴、傾向を正しく把握し、これを幼児教育の上に、言語指導の上に正しく位置づけ、足らざるを補つて使用することを必要としている。(大会抄録58—63頁)

## 幼児の生活環境と

### 読書レディネス(その二)

大阪商業大学附属幼稚園 土 山 汀

第一回の発表は普通家庭に育つた幼児達の読書に関する諸問題などについて調査し発表した。今回は生活状態をこととした幼児達二、三を取り上げ、その幼児達の読書生活はどのようであり、また普通家庭に育つた者との差はどのようであるかなどについて知る為本調査を行った。

#### 一、調査対象、及びその読書生活

##### A 日本に住む韓国人、南鮮を中心として。

家庭では六四%が韓国語と日本語を半々に用い、日本語のみの家庭は三六%である。韓国語のみの家庭は全然無い。

文字は日本語の方が早く覚えている。韓国の文字は、幼稚園や学校に入ってから教えられるのが九五%位である。韓国語の絵本を全然見ないのでそれらも大いに関係する。

B 社会福祉施設の子どもは、施設に入つて来る年令がまちまちである事や、指導者が変わる事などで、一般家庭児のように観察は出来ないが全体的に見て少しおくられているようだ。絵本に対する興味も普通または少ないというのが多い。なお学校に行くまでに五十音と濁音合わせて半分位しか読めないのが多い事などを見ても、幼児が興味を持ってそれらをのばしてやれるだけの指導者の手のたらい事なども関係するのではなからうか。

C 身体不自由児擁護施設の子ども。病気の為読書力のおくれたと思ふ者は六〇%、外で遊ばない為、絵本をよく見るので早いと思ふという者は二八%、関係無いは一〇%である。全体に見るとやはりおくれるようだ。名前を読む方は、

大体の子どもが読めるが、書く方は表に示すように四十%ができない。これは、おくられている為に書けないのも多いが、手の不自由な為エンピツを持つことが出来ない子どももいるからである。

いかなる環境に住む子どもも、自分の身近にある絵本、カルタ、字つみ木などを通して自分の身近に感じる自分の名前の中の一字を中心として字を覚え初める。テレビによって字をよく覚えたという子どもも多くなつて来ているが、これはマスコミの影響であろう。

年令	韓国語	韓国の日本語	社会福祉	身体不自由	一般家庭児
満3.5	0%	0%	0%	0%	1%
4	0	3	0	0	7
4.5	4	10	0	0	14
5	6	12	0	0	21
5.5	8	20	15	4	31
6	12	23	35	8	14
6.5	34	12	25	12	12
7	20	10	20	16	0
半分位	3	0	5	20	0
書きな	2	0	0	40	0
無記入	11	10	0	0	0

名前が書けるようになった年令